

サンゴの図書館

東京都練馬区 蒼井 新

1

「どうしてこんなに本がいっぱいあるの？」

その声に驚いて、修一は思わず晴海の顔を見た。

小学六年生の晴海と一緒に暮らすようになって二週間、初めて彼女が自分から発した言葉だったからだ。

「だって、ここは図書館だから」

「この家は図書館なの？」

「うん、ちょっと変わった図書館だけどね」

「じゃあ、ここにある本を借りてもいいの？」

「いいよ。好きな本を選んでいいよ」

その日の夜、晴海はお風呂で洗った髪をドライヤーで乾かし、修一の妻・美恵子に髪をとかしてもらった。そうして、布団にもぐりこんだ。

修一は晴海の横に寝転んで、晴海が持ってきた本と一緒に読むことにした。

さつき、晴海が本を選んでいるときに修一が声をかけた。

「あとで、寝るときにその本を読んであげようか？」

「えっ？」

晴海は驚いた顔をした。いままで親に本を読んでもらったこと

など一度も無いという。

晴海はためらいがちに小さく「うん」とうなずいた。

十一歳になれば絵本の読み聞かせは「卒業」していることが多いのかもしれない。でも、晴海には子どもらしく甘えられる時間を作ってあげることが必要なんだと修一は思っていた。

晴海を選んだのはエリック・カールの名作『パパ、お月さまとって!』。修一も大好きな絵本だ。

修一が絵本を読み始めて五分も経たないうちに、気がつくとき晴海はすやすやと寝息を立てていた。

たった一人で母親の世話をしていたとき、こんなふうにくつくりと眠れていたのだろうか。

2

晴海は二週間前に谷本修一・美恵子夫妻の「里子」になった。

二週間の間、修一と美恵子は晴海のことを少しでも理解しようと思っっている話しかけた。

「好きな食べ物はある？」

「ありません」

「好きな教科は？」

「ありません」

「芸能人は誰が好き？」

「とくにいません」

「スポーツは好き？」

「べつに」

いつも返ってくる答えは短い一言だけ。ずっと表情は硬いままだった。突然、母親のもとから引き離されて他人の家に来たのだ。頭も心も混乱していて、見ず知らずの修一たちに心を開くことができないのは当たり前だろう。

晴海は母一人、娘一人のシングル家庭に育った。父親は数年前に母親と離婚した。DVが原因だったらしい。いま父親がどこにいるのかはわからないそうだ。母親は離婚後しばらくして心の病気を発症したという。その後、症状が悪化して、晴海の世話どころか、日々の自分の生活さえ困難な状況になっていたらしい。

晴海は誰にも相談することができず、たった一人で母親の世話をしていたという。食事の準備や洗濯も晴海がすべてやっていた。家にあつたお金が底をつき、食べ物を買うお金が無くなって、晴海はやむなくコンビニでおにぎりを万引きした。それを店員に見つかり、それがきっかけで家庭の状況が明らかになったそうだ。母親は市の福祉課の担当者が対応することになり、晴海は児童相談所に保護された。

近隣の住人たちは、幼い晴海がヤングケアラーになっていたことにまったく気づかなかつたという。

3

修一も美恵子も、晴海の里親になることなど、そのときまでまったく考えてもいなかった。

親と暮らすことができずに児童相談所に保護された子どもは、

多くの場合、児童養護施設に入所する。けれども、施設は晴海の家から遠く離れたところにある。晴海が施設に入ることになれば、いま通っている小学校を転校しなくてはならなかった。

小学校を卒業するまであと半年もないこの時期に、できれば晴海が転校をしないで済むようにしてあげたい。児童相談所の担当者はその思った。

そこで、修一のところに連絡がきたのだ。修一と美恵子は里親に登録していた。以前、虐待のニュースに心を痛めて里親になり、いままでも里子を一人育てた経験もある。しかも修一の家は晴海が小学校に通える距離にあるから、晴海の里親には適任だったのだ。

里親になるということは一人の子どもの人生を大きく左右する重大なことだから、決して軽い気持ちで引き受けられるようなことではない。けれども、晴海の状態を考えると、自分たちが里親になるのが晴海にとって良いのではないかと修一は思ったのだ。

4

いまから五十年前、小学校五年生のときに修一は市原市にある若宮団地に県外から引越してきた。そして高校を卒業して東京の大学に進学するまでの八年間をここで過ごした。

一九七〇年代初頭、臨海地域のコンビニナートで働く人々が全国から集まり、新たに分譲が始まった若宮団地に新居を構えた。当時、二〇〇〇世帯は超えていただろうか。高度経済成長期の真つ

ただ中、この住宅団地は賑やかで活気に満ちていた。

けれども、いま、当時の住人たちは高齢化し、地域の活気は失われてしまっている。少年時代の友人たちの家を修一が訪ねると、その多くは雨戸が閉まったまま。人の気配はしない。庭の手入れもなされずに雑草が生い茂っている家も多かった。

最も象徴的なのは、団地の中心にあったショッピングセンターが閉店し、取り壊されたことだった。食料品スーパー、パン屋、おもちゃ屋、洋品店、本屋……、毎日のように買い物に来ていたショッピングセンターは、いまはもう無い。その跡地にはたった一軒の小さなコンビニがあるだけだ。

修一が東京に出ていった後もずっとここに住んでいた父は高齢で昨年亡くなり、その後まもなく、母は高齢者施設に入所した。

修一が少年時代を過ごした家には住む人が居なくなり、空き家になってしまった。

この家をどうすればいいのだろう……。

家を取り壊して更地にし、土地を売るしかない……。

いま、修一は通勤に便利な市川市に住んでいる。この家を処分してしまえば、たぶん、今後、この町を訪れることは無くなるだろう。

それでいいのかな……。

子ども好きだった父は、定年まで勤めた大手電機メーカーを退職した後、この家の一部を改装して小さな文房具店を開いていた。五坪にも満たないような小さな店舗だったけれど、学校帰りの小

学生たちがよく立ち寄っていた。しかし父の健康状態の問題もあり、それも長くは続かなかった。店を閉めたのはもう十年も前のこと。店舗だったスペースは、いまはただの物置になっている。

このスペースを活用して何かできないだろうか？

修一もいま六十歳になり、勤めていた会社を定年になった。

定年後の第二の人生として、この家に帰ってきて何かを始めるのもいいかもしれない。

カフェ、手作りパンの店、立ち飲み屋……、いろんな可能性がありそうだ。でも、飲食業は大変そうだから、ちよつと無理かな。いろいろ考えているうちに、ひとつのアイデアが頭に浮かんだ。

……本屋は？……。

かつてはショッピングセンターの中に本屋があった。本好きの修一が学校帰りに毎日立ち寄っていた書店はいまは無い。若宮団地だけではない。最寄りのJR八幡宿駅やわたじゅくの駅前に数軒あった書店もいまはすべて閉店してしまっている。

いつのまにかこの地域は「本屋の無い町」になってしまっていた。

いま、ここで育つ子どもたちは、本と出逢うことの無いまま、大人になっていくのだろうか？

修一には想像もできないことだった。

この町を「本と出逢える町」にする、それはこの地域への恩返しにもなるし、ちよつとわくわくする。

でも、書店を開く資金など自分には無い。そもそも、この時代

に書店なんか商売として成り立たないんじゃないか……。

そう考えると、本屋を開くのは現実的ではないかもしれない。

それなら……、図書館はどうだろう？

店舗スペースに置けるだけの本を並べた小さな図書館。

そう言えば、前にも、おもしろい図書館の話聞いたことがある。

みんなで作る図書館。

そう、「シェア図書館」だ！

5

シェア図書館というのは、図書館の本棚を小さく区切り、その一つ一つの区画に「オーナー」がいて、オーナーになった人がそのスペースに自分の好きな本を並べるといふ図書館のことだ。

オーナーになるために会費を支払い、それが運営費になるので利用者は無料で本を借りることができる。

「わざわざお金を払ってまで他人に本を読んでもらいたいと思う人などいるのだろうか？ はじめは不安だったけれど、試しに知り合いに声を掛けてみたら、あつという間に二十人近くのオーナー希望者が名乗りをあげた。

自分が読んで感動した本を多くの人に伝えたい、子どもに名作を読ませたい、動物が好きなので動物の写真集を本棚に置きたい……、オーナーになる理由はさまざまだ。けれども、「自分の好きな本をたくさんの人に読んでもらいたい」という思いは共通していた。

この若宮団地はかつてのような活気は失われていたけれど、決

して衰退している町ではなかった。東京への通勤圏内にあり、地価も安い。若い家族には魅力的な地域でもあった。古い住宅が取り壊され、代わりに新しい家が少しずつ建てられている。

ここに住む新しい住人たち、特に子どもたちが気軽に本と出逢える場所。かつての自分がそうだったように、子どもたちが本を読んで心を揺さぶられ、夢を思い描く……、そういう場を作りたい……、そんな思いが沸き上がり、小さな図書館をつくることを心に決めた。

名前は「デーデッポー図書館」。

「デーデッポー」は「だいだらぼっち」とも呼ばれて日本各地に伝承が残る伝説上の巨人の名前。近所にある「高呂塚公園」に高い丘があり、その盛り土のような丘は、デーデッポーが作ったという言い伝えがある。

修一は、少年時代、この伝説を知って、この公園に不思議な力が宿っているように感じた。この図書館に来る子どもたちにも、そんな不思議な力を感じてもらえればいいなと思った。

さっそく、家を改装して本棚を設置し、デーデッポー図書館はスタートした。オーナーは二十人。それぞれの本棚には、オーナー自身が名付けた本棚の名前のプレートが貼られている。

「ファンタジー小説の本棚」、「絶対おすすめ名作絵本の棚」、「図鑑、集めました！」など様々なネーミングの本棚がある。絵本や小説、エッセイ、コミックなどいろんなジャンルの本が並ぶ素敵な図書館だ。

修一・美恵子夫妻が晴海の里親になったのは図書館をオープンして間もない頃だった。

晴海は修一たちと暮らし始めてからも、以前と同じように学校に通い、学校から帰ると誰にも言われないのに宿題のプリントをせつせとやっていた。傍目にはとても「良い子」だった。けれども、表情はずつと硬いままだった。

里親になるときに、修一は晴海の学校に行つて校長と担任教師に事情を話した。

「晴海ちゃんはしっかり者で、おとなしくて良い子です。家庭の状況についてはまったく気がつきませんでした」

校長も担任教師も晴海がヤングケアラーとして母親の世話を一人でやっていたことは知らず、修一の話を聞いてとても驚いていた。

問題行動を起こす子どもには誰もが注意を向けるけれど、「おとなしい子」「良い子」には教師も安心して注意がおろそかになりやすい。けれども、「おとなしい子」「良い子」に悩みが無いわけではない。むしろ自分の心の悩みを人に打ち明けられず、自分一人で悩みを抱え込んでしまっていることもある。目立たないからこそ、問題の根が深い場合も多いのだ。

少し前に、いつものように学校から帰って宿題を終え、ぼんやりとテレビを見ている晴海に、「たまには外で友だちと遊んできたら？」と思わず言ってしまったことがある。

その言葉を聞くと晴海は黙って下を向き、初めて涙を見せた。

考えてみれば、これまでずっと母親の世話をしていた子に、放課後いっしょに遊べるような友だちがいるはずもない。

晴海が家で黙々と宿題をやっている姿を見ながら、「これからほもつと子どもらしくしていいんだよ」と言いたかったけれど、それを晴海にどう伝えればいいのか、修一にはわからなかった。

そんなある日のことだった。

「これ、どうすれば見れるの？」

晴海がめずらしく修一のもとにやって来た。手にはこの図書館で借りた一冊の本を持っている。開いたページにはQRコードが載っていた。最近の子ども向けの本はネットと連動して様々な情報をウェブサイトで見ることができる仕組みになっているらしい。

「このQRコードで本のサイトにアクセスできるみたいだね。何の本を読んでいるの？」

それは『わたしはサンゴ』という本だった。小中学生向けにやさしく書かれたシリーズの一冊で、大塚奈美さんというサンゴの研究者が書いた本。

「サンゴの本かあ。面白そうだね。どんなサイトにつながるんだろう？ ちょっと見てみようか」

タブレットのカメラアプリを開いて渡すと、晴海はさっそくそれをQRコードの上にかざした。

すると、動画の画面が現れた。

海底の暗闇に包まれて、白い物体がぼーっと浮かび上がる。

白い物体はサンゴのようだ。

そのうちに、一つのサンゴがアップになる。しばらく見ていると、そのサンゴの先端がぼっかりと口を開いた。そうしてその先端から小さな丸い粒が放出された。

一つのサンゴからだけではない。隣のサンゴからも、その隣のサンゴからも、次々に白い粒が吐き出された。

サンゴの産卵だ！

やがて、群生しているサンゴから小さな卵が一斉に海中に排出される。無数の白い粒が海中をただよい、キラキラと輝く。まるで雪が舞っているようだった。

「うわー、きれい！」

晴海が思わず声を上げた。晴海がこんなに子どもらしい歓声を上げるのを聞いたのは初めてだ。

晴海はその後、ずっとサンゴの産卵動画に見入っていた。

「きれいだねえ。本当にきれいだねえ」

繰り返し繰り返しつぶやいていた。

7

「他にもサンゴの本、あるかなあ？」

デーデッポー図書館の本棚に並んでいる本を晴海が見渡している。サンゴの魅力にすっかりはまってしまったようだ。

サンゴの本は無かったけれど、『みんなで水族館に行こう』というガイドブックを見つけた。

その本には、各地にある水族館の案内が書かれていた。

「水族館に行けば、サンゴ、見れる？」

「そうだね。たぶん見られるんじゃないかなあ」

「家の近くに水族館ってある？」

「そうだなあ。葛西臨海水族園が近いかなあ。けっこう大きな水族館だと思うよ」

葛西臨海水族園の公式ウェブサイトを開くと、巨大なガラスドームの建物の画像が現れた。

「みどころ」をクリックすると、「サンゴ礁の海」というコーナーが出てきた。大きな水槽にカラフルなサンゴの写真が載っている。

「水族館、行ったことある？」

「無い」

いつもはそれだけで終わるけれど、さらに一言、続きがあった。

「……、行ってみたい」

晴海が自分から何かを「やりたい」と言うのは、これが初めてだった。よく聞いてみると、親と一緒に水族館や博物館などにお出かけをしたことは無いという。

8

次の日曜日、晴海と美恵子、修一の三人で葛西臨海水族園に行った。JR内房線の八幡宿駅から電車に乗って蘇我駅で乗り換え、京葉線で葛西臨海公園駅へ。電車で一時間もかからない。案内近くにある。

この日、市川に住んでいる「元里子」で、いまは大学生となっ

た麻衣も誘った。麻衣は水族館の入り口で私たちを待っていた。晴海は麻衣と会うのは今日が初めて。麻衣の姿を見て晴海は私の後ろにさっと隠れた。初めて会う人には緊張をってしまうのだろうか。

「晴海ちゃん、一緒に水族館を回ろうね」

麻衣は晴海の手をやさしく握った。麻衣が晴海と同じ年齢の頃のことを修一は思い出した。麻衣も、幼い頃に親から虐待を受け、晴海と同じように、周囲から固く心を閉ざしていた。

巨大なガラスドームの水族館は見どころがたくさんあった。大きな水槽の中を回遊するクロマグロ、かわいらしく泳ぎ回るペンギンたち……。でも晴海の目が釘付けになったのは、やはり「サンゴ礁の海」のコーナーだった。

色とりどりのサンゴ、そしてサンゴ礁に棲む小さな魚たちの群れ。その様子を晴海は飽きずに眺めていた。

麻衣は館内を回るとき、ずっと晴海と手をつないでいた。

「私はね、恋人と最初のデートする場所は水族館って決めているの。お互いに無理に話をしなくても気まずくならないでしょ？」

そんな他愛もない話をしているうちに、晴海は麻衣に少し心を開いたようだった。

「実の親が私を育ててくれなかったから、私は里子になったの。晴海ちゃんと同じかな。だから、私のことをお姉ちゃんだと思っ
てね」

晴海が小さくうなづく。麻衣とつないでいる手をぎゅっと握っ

たように修一には見えた。

水族館に来て、これまでずっと硬かった晴海の表情が少しだけ和らいだように思えた。

9

「来た！ 来た！ 来た！」

晴海が大声を出して修一のところへ駆け寄ってきた。手にハガキをしっかりと握りしめている。

「『わたしはサンゴ』を読んだ感想を、著者の大塚奈美先生に送ったら？」と修一が提案して晴海が手紙を書いて送っていた。すぐに大塚先生から返信が届いたようだ。

『晴海ちゃん。お手紙ありがとう。『わたしはサンゴ』を読んでくれてうれしいです。サンゴはともかわいくてすてきな生き物です。これからもサンゴのことをたくさん調べてみてください。さい。私の研究室でサンゴを育てています。もし興味があったら、見に来てください。千葉海洋大学海洋生物学部 大塚奈美』

晴海は何度もこのハガキを読み返している。

「ねえ、大塚先生がサンゴを育てているとこ、見に行ってもいいかなあ」

少し遠慮がちに、でもはっきりとした口調で修一に尋ねた。

ハガキに書かれていた大塚先生のメールアドレスに修一が連絡をして、ハガキのお礼とともに、晴海が研究室でサンゴを見せて

もらいたいと希望していることを伝えると、大塚先生からは「いつでもどうぞ!」とすぐに返事がきた。

千葉海洋大学は、八幡宿駅から電車一本で行ける場所にある。大塚先生と大学の最寄駅で待ち合わせをして、研究室に連れて行ってもらった。

研究室にはサンゴの水槽がいくつも置かれていた。

「うわー!」

色とりどりのサンゴを目の当たりにして晴海は歓声を上げた。

大塚先生は、サンゴの標本を顕微鏡でのぞかせてくれたり、沖縄の調査の写真を見せてくれたりした。

「いつか、晴海ちゃんに沖縄の青い海の中のサンゴ礁を見てほしいなあ」

「沖縄?」

「そう、沖縄の海は本当に素敵よ」

「……沖縄……、行ってみたい……」

写真を見ながら、晴海は小さな声でつぶやいた。

10

三月。晴海は小学校を卒業した。

デーデッポー図書館がオープンして一年が経過した。口コミで評判が広がり、放課後に訪れる子どもたちも増えた。

本棚のオーナーも三人増えた。若宮団地の住人としてオーナー第一号になったのはミステリー好きのビジネスマン。愛読するミ

ステリー小説を並べて「若宮ミステリー文庫」という名前の本棚を作った。

この「若宮ミステリー文庫」は団地に住むミステリーファンの間で評判になった。これをきっかけに「若宮ミステリーファンクラブ」が結成されて、趣味の読書会を開いているらしい。この団地の住人の中にこんなに多くのミステリーファンがいたということが驚きだった。

オーナー第二号は、料理好きの主婦。かつて都内で料理教室を開いていたけれど、結婚して若宮団地に転居してきたという。オーガニック料理のレシピ本を中心に、料理本の本棚を作ってくれた。

「結婚して仕事をやめちゃったけれど、またここで料理教室を開こうかしら」

目を輝かせていたから、いずれ本棚の読者を誘って料理教室が始まるかもしれない。

小さな小さなデーデッポー図書館は、少しずつ、「地域と人が出逢う場」「子どもと本が出逢う場」になっている。「本屋の無い町」が「本と出逢える町」に変わりつつある。

そして三人目のオーナーは大塚奈美先生。図書館のことを聞いて「私もオーナーになります!」と、すぐに本を送ってくれた。

大塚先生の本棚にはサンゴの本だけでなく、沖縄の歴史や文化をテーマにした本や地球環境に関する本も並んでいる。

「サンゴを守るためには、その土地の文化や歴史を理解したり、地球の環境の大切さも知ってほしいから」

本棚の名前は「サンゴの図書館」。

晴海は、「サンゴの図書館」の本を熱心に読み、それに飽き足らず、市内の中央図書館でサンゴの本や沖繩の本をたくさん借りてきて読んでいる。

「私、沖繩に行くんだ」

いつの間にか「行ってみたい」が「行く」に変わっていた。

麻衣がアルバイトでお金を貯めて、晴海を沖繩に連れて行ってくれるそうだ。その代わりに、整理整頓が苦手な麻衣の部屋の掃除を晴海が手伝うことになっているらしい。

いまでは「将来、大塚先生のようなサンゴの研究者になる！」が晴海の口癖になっている。いつの日か、晴海がサンゴの研究者になって、この図書館に晴海が書いたサンゴの本を置く日が来るかもしれない。

晴海の母親はまだ入院治療中で、病状は少しずつ快復しているそうだが、退院は当分先になるらしい。晴海が母親と一緒に暮らせるようになるにはもう少し時間がかかりそうだ。

一冊の本との出会いがきっかけで、固く閉ざされていた晴海的心が開かれた。そして様々な出会いを経て、将来の夢を持つようになった。里子として、これからもまだ寂しい思いや辛い思いをするかもしれないけれど、晴海の成長をしっかりと支えたいと修一は思う。

そうして、晴海は中学生になった。

ある日のこと、晴海は一人の女の子と一緒に学校から帰ってきた。

「同級生を連れてきた」

中学の制服姿の女の子が隣に立っている。晴海が友だちを家に連れてくるのは初めてのことだ。

女の子は人見知りなのか、修一と目を合わせずにうつむき加減だった。そして、ふと顔を上げ、本棚を見渡して晴海に尋ねた。

「どうしてこんなに本がいっぱいあるの？」

晴海が答えた。

「だって、ここは図書館だから」

(終)